

Turn-taking 研究の動向

— "turn" と "turn-taking" をめぐる議論を中心に —

金 志宣

要 旨

本稿では turn と turn-taking 研究の動向を探るに当り、まず会話分析を手法とするエスノメソドロジーの理論的な背景について述べる。turn-taking 研究の基本概念となる "turn" をめぐる議論の論点を turn の日本語訳から探り出し、問題の所在を明らかにする。そこで浮き彫りになった turn の複合的な性質に対する捉え方を二つの観点—テクニカル・アプローチ、ノンテクニカル・アプローチ—で概観し、それを踏まえた上で、日本語を対象とした研究に補われるべき点への提言を試みる。次に、"turn-taking" の捉え方を三つの観点—確率モデル・アプローチ、シグナル・アプローチ、連鎖アプローチ—から批判的に概観する。さらに、turn-taking 研究の草分けと称される Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) を基にししながら精緻化を図った研究の中で、turn-taking システムの基本概念となる、turn 構成要素の完了及び移行関連場を予期するための指標となるリソースと、turn-taking との関係性を究明する研究を中心に、その成果をまとめる。そうすることによって、turn-taking メカニズムの解明に向けて残された課題についての示唆が得られる。

【キーワード】 turn、turn-taking、移行関連場の予期可能性、会話分析

1. はじめに

二人以上のありふれた会話場面を想定してみよう。まず、会話とはどういうものを指しているのだろうか。会話は参加者が各自、話すことと聞くことを交替させることで成立する形態、あるいはそのような交替が常に可能である話の形態である (Speier 1973: 72)。すなわち、会話とは参加者が互いに話し手と聞き手の役割を絶えず交替していく過程ということである。そこには前もって決められた順番ではなく、参加者自身もいつ話を始め、終わるかについて意識していないはずである。それにもかかわらず、わずかな重なりや沈黙はあるものの、順序立てられた話し合いが整然と進められる。参加者は何を手がかりに互いの順番を認知しているのだろうか。また、それはどのような形で行われるのだろうか。

これらの点に着目し、どの話者がいつ話すかという観点で、会話を成り立たせる仕組みを探るのが turn-taking 研究の出発点であり、到達点でもある。つまり、異なる話者が互いに発話を交替しながらまとまりのある会話を構成していくプロセスを詳細に記述し、会話がどのような仕組みによって成り立っているかを探ることに、その意義がある。しかし、turn と turn-taking の概念をめぐる捉え方は多岐にわ

たっており、理解や分析上の混乱を招きかねない。

そこで、本稿では turn-taking 研究の現状を探る前提に、turn と turn-taking をめぐる議論をまとめ、用語や概念を整理する。また、turn-taking 研究の一環として、話し手が変わり得る地点の予期を可能にするリソースに関する研究を紹介し、現段階での知見を得る。

2. 会話分析の背景：エスノメソドロジー

近年、会話分析は社会学の一派であるエスノメソドロジーを基盤として、顕著な形で発展し、言語学及び社会学など広い領域に渡って重大な影響を及ぼすようになった。社会(言語)学の目指すところは、社会の秩序がどのように形成され維持されているかを、言語事象から探ることであり、その点エスノメソドロジーの行っている研究も同様である。それでは、エスノメソドロジーの研究はどのような点で他の研究手法と異なるのだろうか。それを明らかにするために、エスノメソドロジーが立脚する理論的前提を見てみよう。

津田 (1989)によると、従来の構造機能主義をはじめとする社会学においては、社会的な秩序が形成されるメカニズムはもっぱら外在する一定の規範が

存在し、それによって社会的行為が支配されているものとして考えられたとされる。この観点に立てば、個々の行為はその規範が具体化されたものとして捉えられることになる。これに対してエスノメソロジーの主張は、行為自体をもっとダイナミックなものとして捉える点にその特徴がある。すなわち、一定の行為がなされると、その行為を一要素とする社会的文脈が構成される。その文脈をコンテキストと定義づけると、そのコンテキストによってそれぞれの行為が解釈し直され、また新しいコンテキストが構成されてゆく。言い換えれば、行為を規定していると考えられるコンテキストが規範となって行為が行われるだけではなく、コンテキストが行為を規定すると同時に、行為もコンテキストを規定するのである。こうした意味で、コンテキストと行為の間に相互依存性、あるいは反映性を認める立場をとる。このような一連のプロセスは相互行為の過程を通して、社会的に組織化されてゆくものである。エスノメソロジーの目的は、会話分析を通して社会的に組織化されていく過程についての考察を深めることであり、「見られてはいるが気づかれていない：“seen but unnoticed”」(Garfinkel 1967)日常的な場面のルールについての考察である。これは、Garfinkel (1967)によるエスノメソロジーという造語の持つ意味、つまり「場の成員(エスノ)が、解釈を通して『社会的構造感：“the sense of social structure”』を生み出す、その仕方(メソド)を検討(ロジー)するもの」(Leiter 1980：高山訳 1987: 139)に示されたとおりである。このような理論的前提に立って、社会的相互行為としての会話に焦点を当て、その秩序形成のメカニズムを解明しようとするのが、会話分析の目標である。

こうしたことは必然的にデータ収集や分析の方法に影響を及ぼす。分析が相互行為のデータに基盤を置いている点で、データ志向性が非常に強い。分析の対象となるデータは、主に日常のありふれた会話である。データとなる会話をよく観察し、録音した会話を詳細に記述し、主に前後のコンテキストに焦点を当てることによって、言語事象の意味と機能を探ることに主眼を置く。そして、秩序形成が具体的な相互行為である会話にどのように現れているかを明らかにする。

このようなエスノメソロジーの枠組みの中で研究されたテーマの一つに、会話における turn-

takingのシステムがある。これは、エスノメソロジーの基本的な研究姿勢とも言える「状況の適切性：“conditional relevance”」¹の概念に基づいており、turn-takingすべき条件がある時、相手がその条件に答えるという形でturnを取るという考え方である。そして、エスノメソロジーによって、会話におけるturn-takingが無造作に行われるのではなく、ある規則にのっとって行われていることが明らかになった。turn-takingシステムにおける規則の詳細は後述することにする。次章では、turn-taking研究を概観する前提に、turnとturn-takingをめぐる議論の論点を提示し、それぞれの捉え方を批判的に概観する。

3. turn と turn-taking の捉え方

3.1 turn と turn-taking をめぐる議論の論点

turn-taking とは、会話の中で turn が移り変わることである。では turn とは何であろうか。まず、日本語を対象とした諸研究において、turn がどのように訳され、各々に相応する turn-taking がどのように命名されているかを、以下に記す。

turn

- ・会話の順番 (山崎・好井 1984)
- ・turn (渡辺 1985; 西原 1991; 新井 1995; 小室 1995; 金 1997, 2000, 2001)
- ・発言の順番 (ロングマン応用言語学用語辞典 1988)
- ・発話機会 (南出・内田 1989)
- ・話順 (田中 1990)
- ・ターン (ザトウスキー 1993; 深澤 1997; 牧野 2000; 木暮 2001a, 2001b)
- ・発話順番 (メイトド 1993; 舟橋 1994; 橋内 1999; 李 1999)
- ・発話の主導権 (小室 1995)
- ・発話ターン (初鹿野 1998)

turn-taking

- ・会話の順番取り (山崎・好井 1984)
- ・turn-taking (渡辺 1985; 西原 1991; 新井 1995; 小室 1995; 金 1997, 2000, 2001)
- ・発言交替 (ロングマン応用言語学用語辞典 1988)
- ・発話機会交代又は話者交代 (南出・内田 1989)
- ・話者交代 (ザトウスキー 1993; 橋内 1999)
- ・話者交替 (メイトド 1993; 深澤 1997)
- ・発話順番のうけつぎ (舟橋 1994)
- ・発話の主導権の交替 (小室 1995)
- ・発話ターンの交代 (初鹿野 1998)

- ・発話順番のやり取り (李 1999)
- ・ターン・テーキング (牧野 2000)
- ・発話権取得 (木暮 2001a, 2001b)

上記のturnの命名において、英語の「turn」と「ターン」はさて置き、日本語の訳語を見る限り、turnは概ね「話し順番」を指すようである。一方、turn-takingの場合は「話し順番 (機会)の交替 (交代/ うけつぎ/ 取り/ やり取り)」に加え、「話者交代 (交替)」または「発話の主導権 (発話権)の交替 (取得)」のように命名されている。いずれもturnの移り変わりではあるが、turnを「話し順番」のみならず、「話者」または「発話権」までに拡大して捉えていることが分かる。殊に、初鹿野 (1998: 147)では、「発話ターン」という一見奇妙とも思われる命名がなされているが、論文の中で、「会話は話者同士が順番に発話を行う、つまりターンを交代することによって成り立っており、その発話ターンの交代にはいくつかの特徴がある」と述べていることから、turnを順番と捉え、話し順番という意味で「発話ターン」と名づけたのではないかと推察される。さらに、もう一つ注目すべきところは、引用文の「話者」に関する言及である。これは、turn-takingの命名の一つに「話者交代 (交替)」があることと関連する。もしこの訳が正しいとしたら、turn-takingとspeaker changeは同じことを指していることになる。turnを「話し順番」としながら、turn-takingを「話者交代 (交替)」とする背後には、turnの概念に含まれる多重的な意味合いが潜んでいるのではないかと考えられる。すなわち、turnとは、「話者」が権利として有する「順番」という要素を兼ね備えた概念であり、それが具現化して観察可能な「発話」の形で現れたものであると言えよう。従って、上記のturn-takingの命名、つまり「話し順番の交替 (交代/ うけつぎ/ 取り/ やり取り)」、「話者交代 (交替)」、「発話の主導権 (発話権)の交替 (取得)」はそれぞれ一理ある命名と言え、turn概念のうち一部しか表していないことも否めない。

このように、turnの日本語訳を調べることで、turnが複合的な性質ゆえに厄介な概念であることが、自ずと浮かび上がってきたと思われる。このような問題は日本語の研究に限らず、英語などを対象とした諸研究においても論争を巻き起こすテーマの一つとなっている。言い換えれば、欧米における諸研究の中で、turnという概念をめぐる様々な解釈に基づいた議論が、日本語を始めとする諸言語において

turnの命名や範囲や境界を定める上で困難を引き起こすことになり、さらにはturnを基本単位として行われるturn-taking研究にも大きな影響を与えることになる。

3.2 turnの捉え方：二つのアプローチ

turnの概念をめぐる議論は、次のようなvan Lier (1988: 100)の問い、"What is a turn? or When is a turn?"に端的に現れている。van Lier (1988)は、turnの概念は明確でもあり、曖昧でもありとし、次のように述べる。誰かが "Who has the turn now?" と聞いた場合、我々は何のためらいもなくturnを持っている人を当てることができるか、あるいは少なくとも、会話参加者AとBがturnを取ろうと争っていると答えられるだろう。我々は直観的に、turnを、ある人が他者の発話開始まで話し続けるものと考え。しかし、実際の会話においてturnの境界は不確かであり、重なりや間違った開始、言い換えなどが度々見られ、時にはturnが未完了のまま終わったり、中断されたりすることもする。つまり、turnは直観的に単純明快のように思われるが、その実体は非常に複雑な形で入り組んでいるため、曖昧なものとして捉えられるのである。以下では、turnとは何かについて言及した諸研究を紹介し、それぞれの捉え方をまとめる。

3.2.1 テクニカル・アプローチ

Jaffe & Feldstein (1970)では、会話は最初の単独音声を発した話し手のturnにより開始されて発言権を得ることになり、その話し手は他者の単独音声が発せられるまで発言権を維持すると考える。また、Cherry & Lewis (1976)は、他者が話す権利を受け継ぐ時点までの、現在の話し手による発話をturnとする。同様に、Feldstein & Welkowitz (1978)も、turnを一人の参加者が話し始める瞬間開始され、他の参加者が話し始める直前に終わるものとする。いずれの場合においても、現在の話し手のturnが後続する他者の発話によって決められるとする点で一致する。また、turn境界の決め手となる他者の後続発話は、それ自体がフロア²への要求をも含んでいるとされる。ここではturnを、会話(talk)を構成する一種の単位(unit)と考える。つまり、会話はturnの連続を通して成し遂げられるものであり、turnは物理的な記述単位として捉えられる。これに脈を同にするSacks, Schegloff & Jefferson (1974, 以下SSJとする)は、多少抽象的な言い方ではあるが、会話を一種の経済

システムとし、turnを商品とする。その商品は、特定の値段・権利・義務が課される所有物でもあり、turnという稀なりソースが一人の顧客だけに配分されるメカニズムをもつ経済システムが存在することになる。これらは、turnを会話の構造的スロット(structural slot)と捉えるという意味で、「テクニカル・アプローチ」(McLaughlin 1984)と称される。

テクニカル・アプローチは、次のような点で批判される。Duncan (1972, 1973, 1974, 1977)とEdelsky (1981)は、会話の構成要素にはturnとそれ以外のもの(non-turn)があるとし、テクニカル・アプローチではback-channelやside-commentなどのnon-turnの扱いが困難であると指摘する。Wilson, Weimann & Zimmerman (1984)では、turnそのものの定義が明らかではないとする。テクニカル・アプローチの立場によると、turnは各参加者によるsoundとsilenceの物理的な連続であり、これらの流れは話し手と他参加者による発話と沈黙で分割されることになる。しかし、turnを構成する要素や要素間の繋がりについての言及は乏しく、物理的なデータだけに限られている。音響的な流れという物理的な側面に加え、発話に対する話し手自身の態度を表すような音調及び言語行動に支持や協調や特定のニュアンスを添える顔の表情・頭や目の動き・身振りといった非言語的現象なども考慮に入れるべきであると述べている。また、Power & Dal Martello (1986)は、SSJではspeakerとturnが混用されており、両方の使い方に誤解が生じ得るとし、その点を補うために次のようなturnの定義を提示する。会話参加者Xはtという時間にturnを持つ。tに参加者同士が同意し合ったら、Xは何かを話すべきであり、他の参加者はXが言っていることに注目すべきである。Markee (2000)は、テクニカル・アプローチによるturnの捉え方は、実験的な場面において分かりやすく、数量化するのに適しているとする。しかし、実際に観察された会話の中には参加者同士の先取り完成や割り込みなどによる重なりが見られ、これらの現象が説明し切れないため、より精緻化する必要があると述べる。

テクニカル・アプローチに対する主な批判点をまとめると、次のようである。

(1) turnの定義が明確に示されず、turnと話者または話す権利という用語が混用されているため、理解と分析の難点となる。

(2) turnを現話者の発話開始から他者の発話開始までとし、物理的な記述単位として捉えるだけで、turn構成要素に関する詳細が記されていない。そのため、重なりやギャップなどの現象について十分な説明ができなくなる。

(3) turnとnon-turnの区別が曖昧であるため、back-channelのような発話の扱いが困難である。

これらの批判は、3.1で日本語訳から探り出したturnの複合的な性質、つまり「turnは、『話者』が権利として有する『順番』という要素を兼ね備えた概念であり、それが具現化して観察可能な『発話』の形で現れたもの」としたことに基づいている。

3.2.2 ノンテクニカル・アプローチ

テクニカル・アプローチに対して、turnを全く違う観点から捉えるのが、直観的アプローチと言われるノンテクニカル・アプローチ(McLaughlin 1984)である。会話の構成要素にはturnとnon-turnがあると主張するDuncan (1972, 1973, 1974, 1977)の研究において、turnの概念を明白に読み取ることは容易ではないが、コンテキストの中で会話参加者が話す権利を持ち続ける持続時間内で行われる全てのこと(イントネーション、パラ言語、非言語行動など)を視野に入れ、turnとnon-turnに分けているようである。Edelsky (1981)は、turnについてより具体的に述べている。turnは、指示的あるいは機能的メッセージを伝える意図のあるon-recording speaking(参加者によって認知、解釈、記録される発話)に限り、off-recording side comment(参加者によって認知、解釈、記録されないコメント)やback-channelのような発話はturnと見なさない。これは、「会話中の心理的または時空間内で認識されるトピックなどが今進行していること」というフロアーの概念に基づくものと考えられる。Edelsky (1981)はテクニカル・アプローチに対して、turnを取ろうとする参加者の意識とturn-takingへの意図を考慮に入れるべきであると指摘する。Owen (1981)も同様に、turnは少なくとも一つ以上のmove³を含み、機能的な側面を持つものとする。

しかし、直観的アプローチのいうように、turnをメッセージを伝える意図のある発話とした場合、第三者あるいは分析者が話し手の意図を推測し、再構築するような膨大な作業が要求されることになるが、それはほとんど不可能に近いと考えられる。また、参加者が何を意図しているかに対する分析者の直観

は、規則的で体系的な会話の仕組みの考察として妥当性や信憑性があるとは言いがたいと批判される (McLaughlin 1984)。このアプローチに関しては、3.3 turn-taking の捉え方のうち、3.3.2 シグナル・アプローチのところでも詳述する。

turn をどのように定義すべきかについて、テクニカル・アプローチとノンテクニカル・アプローチ間の合致点はまだ見出せていないのが現状であるが、それぞれの観点や解釈に基づいた turn-taking の研究がなされつつある。

3.2.3 日本語における turn とは

日本語を対象とした turn-taking の研究においても、前述したように turn 及び turn-taking の訳語を始め、概念や範囲などが統一されないまま用いられる傾向にあり、どこまでを分析の対象とするかについて定説はない。以下に、それぞれの turn の定義と範囲を記すが、できるだけ各々の論文に書かれた用語や表現をそのまま用いることにする。

● 舟橋 (1994) :

二人の話し手の発話を「発話順番と「あいづち」に分ける。一人が話し始めてから、もう一人が話し始めるまでの発話を発話順番とするが、これは基本的に杉戸 (1987)のいう「実質的な発話」⁴を指す。また、実質的な内容を表す言語形式を含まず、聞き手に働きかけない発話で、発話が求められていない場所での単にフィードバックのためだけの発話をあいづちとする。

● 小室 (1995) :

turn-taking を発話の主導権(turn)の交替とし、そのもの自体に実質的な意味をほとんど含まないあいづちや直前の発話をパラフレーズしたもの、また独り言のように発せられた短い感想などはそこで turn の交替が起こったとはみなさいとする。

● 深澤 (1997) :

話し手が発話権を取って発話を始め、他の話者の発話やポーズで区切られて話すのをやめるまでのひとまとまりの発話を一つのターン(一人の話者が話す順番)とし、分析の単位とする。また話し手の発話中になされた聞き手の言語表現で、「はい」「ええ」「あ、そうですか」などの応答詞、先行する発話のオーム返し、感動詞のように話し手に対して実質的な働きかけをしないものを相づちとみなす(杉戸 1987; メイナード 1993)。それ以外の発話は実質的

な発話とみなす。

● 初鹿野 (1998) :

発話ターンとは、杉戸 (1987, 1994)を参考にし、他参加者の音声連続やポーズによって区切られた、一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続である。

● 李 (1999) :

「発話順番」を「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」と定義する。但し、後続発話を考えている間の沈黙は「話し続けることをやめる」と認定しない。

● 牧野 (2000) :

会話を「実質的な発話」と「あいづち的な発話」に分け(杉戸 1987)、さらに実質的な発話を PPU (Paused-bounded Phrasal Unit) (メイナード 1993)を単位として分けて記述した。ターンは、話し手の実質的な発話で構成され、現在の話し手が実質的な発話を始めてからそれを終えるまで、つまり長い沈黙や他からの邪魔、次の話し手の実質的な発話によって区切られる連続した一人の話し手の発話である。あいづち的な発話は単独ではターンを構成しえない。

● 木暮 (2001b) :

ターンは話者交替の単位で、一人の会話参加者が話し始めてから話し終わるまでの発話であり、話し手ターンと聞き手ターンに分けられる。話し手ターンとは、話し手が行う発話で、話題に関する情報の提供や話を展開させていく情報の要求を行う発話である。聞き手ターンとは、話し手への反応を示す表現形式が不定の発話である。先行する話し手の発話に対する理解だけでなく、話し手発話に直接関与する実質的な内容を含むが、話の展開に寄与するようなものではなく、話し手発話に従属する。また、あいづちは話し手の発話に対する理解のみを示す、表現形式が定まっている発話である。

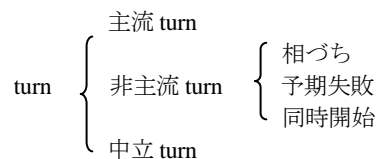
以上、日本語を対象とした諸研究において、turn がどのように定義づけられ、また何が turn と見なされ、何が turn の範疇から除外されているかを紹介した。全ての研究において turn をテクニカル・アプローチの観点で捉えており、現話者の発話開始から他者の発話開始やポーズで区切られるまでを turn とすることが分かる。しかしながら、実質的な内容を持つ発話のみを turn と見なしているところは、ノンテクニカル・アプローチのいうメッセージを伝える意図のある、一つ以上の move を含む発話

のみを turn とする立場に近い。さらに、相手の turn 中に見られるあいづち(的な発話)を turn ではないとする点は、ノンテクニカル・アプローチの non-turn の一つに back-channel が含まれるとしたことと一致する。但し、日本語の研究ではそれらを分析の対象から除外してしまう(小室(1995)は turn-taking のモデルを抽出する際にあいづちを考慮に入れている)反面、ノンテクニカル・アプローチでは back-channel などを含む side-comment に加え、非言語行動まで分析の射程に入れている点で大きく異なる。

日本語の場合、ほとんどの研究者が、実質的な内容を持たないあいづち的な発話の存在は認めているものの、単独では turn を成さないとし、分析の対象から外すという立場が優勢である。しかし、実際の会話において、実質的な発話の最中、あるいは現話者の turn 終了と次話者の turn 開始の間に他者のあいづち的な発話が挿入される場面は多々ある。あいづち的な発話を、実質的な意味を持たず聞き手に直接働きかけないという理由で看過あるいは過小評価することは、話者ごとの発話交替の差を見過ごすことになり、turn-taking の実態を把握するのに欠かせない要素を前もって除くことになるのではないだろうか。メイナード(1993: 55)の指摘どおり、「会話というものが当事者間の協力によって成り立っているものである限り、話し手中心主義の言語学から脱皮し、話し手と聞き手との接点に研究の焦点を据えなければ、人と人とのコミュニケーションという意味での会話の姿を知ることはできない」と思われる。聞き手は、話し手の turn が持続している間または turn 終了後に、あいづち的な発話を差し挟みながら反応を示すことによって話の流れに参加し、さらには turn-taking を行って話し手になることもある。このような話し手と聞き手とのやりとりを明らかにするためには、その実態が記述でき、分析を可能にする単位が必要になってくる。

そこで、van Lier(1988)の分類に修正を加え作成した新井(1995)の turn と turn-taking の捉え方に注目したい。新井(1995)は、「turn」を他の参加者の音声言語連続によって区切られた、あるいは重複した参加者の音声言語連続であるとし、その内容及び turn-taking との関わりの有無によって、主流 turn と非主流 turn に分け、全ての発話を turn の範疇に入れる試みを行っている。これが、今までの研究とは大きく異なる点として評価され得る。

同様に、金(1997, 2000, 2001)でも turn を全ての発話が記述できる物理的単位と捉え、turn / non-turn という二分類ではなく、全発話を turn とし、分析対象に入れるべきであると推し進める。基本的には新井(1995)の分類を取り入れた形で、一部に修正を加えた分類とその下位分類を提示する。すなわち、「turn」を会話参加者が話す権利を持ち続ける間に発する全ての発話と捉え、一人の話し手が話し始めてから他者の発話やポーズで区切られ、話すのをやめるまでのひとまとまりの発話と定義し、主流・非主流・中立 turn に分ける。こうした三分類の枠組みを設けた背景としては、会話は主となる部分(主流 turn)と主ではないが欠かせない部分(非主流 turn)で構成されていると同時に、他の参加者に聞こえているかも知れないが、会話の一構成要素としては認知されない発話(中立 turn)が存在する可能性に注目したからである。つまり、主流・非主流 turn だけでは収めきれない発話が観察されたため、そのような発話を中立 turn と名づけて加えることによって、全ての発話が網羅できるようにする。新井(1995)の分類では、中立 turn を非主流 turn に含まれるものとする。しかし、金(1997, 2000, 2001)では非主流 turn が主流 turn に何らかの影響を与え、turn-taking に間接的な影響を及ぼすのに対し、中立 turn は主流 turn や turn-taking にほとんど関わっていないことから、中立 turn を主流・非主流 turn に並ぶ上位のものとする。turn の分類を図示すると、次のようになる。



(金 2000: 83)

「主流turn」とは実質的な内容の発話でフロアーを取り得る内容のturnであり、会話の主流を成すものである。これはturn-takingに直接的な関わりを持つ(新井 1995)。「非主流turn」とは、フロアーを取り得る内容を持たないturnであり、turn-takingに直接的には関わっていないが、主流turnとの間に何らかの関わりを持ち、間接的影響を及ぼすものである。これは現話者のturnが持続している間に挿入されたり、または重複する聞き手の短い発話であるが、タイミングや参加者の容認度によって相づち・予期失敗・同時開始に下位分類される。非主流turnの大半を占

める「相づち」は、実質的な内容を表す言語形式(動詞や名詞など)を含まず、判断・説明・質問・回答・要求など事実の叙述や聞き手への積極的な働きかけをしないような発話で、相づち詞・応答詞・感動詞・先行発話の繰り返し・単純な聞き返し・笑い声などを含む広義のものと捉える(杉戸 1987)。「予期失敗」は、現話者以外の参加者がturnを取ろうと試みるものの、タイミングが悪く現話者のturnに重複してしまい、turnを取るのに失敗する発話を指す。この場合、現話者によるturnが維持される。「同時開始」は、二人以上の参加者が次のturnを取るため同時に話し始める際、重なり気づいた一方が途中で話すのをやめる発話を指す。また、「中立turn」は、会話の流れに外れた独り言を含む私語や混乱などによる聴取不能の発話を指す。ここでいうturn-takingとは主流turn間の交替のみを指しており、主流turn内で行われるさらに小さい相互行為、つまり主流turnと非主流turn間の移行はturn-shiftと名づけ、新しい枠組みを提示する(金 2001)。turn-shiftの際に事実上の話者交替は起きていないが、他者の発話の挿入による関与がturn-takingに与え得る影響を考慮に入れるべきであると考えたためである。新井(1995)と金(1997, 2000, 2001)はturnの捉え方については類似しているが、turn-takingに関する取り組み方や分類に相違が見られ⁵、それぞれの視点に立った分析を行う。

3.3 turn-takingの捉え方：三つのアプローチ

turnの定義をめぐる議論が続けられる中、それぞれの解釈に基づいたturn-takingの研究がなされてきた。ここでは、turn-takingのメカニズムに関する三つのアプローチ(Wilson et al. 1984)を概観し、理論的及び実証的な観点からの評価を試みる。その中で、確率モデル・アプローチ(stochastic modelling approach)と連鎖アプローチ(sequential production approach)は、turnをテクニカル・アプローチの観点で捉える立場であり、シグナル・アプローチ(signalling approach)はノンテクニカル・アプローチの立場である。

3.3.1 確率モデル・アプローチ (stochastic modelling approach)

確率モデル・アプローチは、会話参加者の発言の音量から計測された各発言時間及び空白時間という客観的データとturn-takingの現象を取り上げ、それを確率過程と見ることにより、会話のもつ物理的

側面を計量的に分析したものである。Brady (1965, 1968, 1969)は、会話を一定の間隔に区切って発言時間と空白時間を測定し、多様な長さのパターンに関する分布を記録し、確率モデルを提示した。確率モデルは、turn-takingという現象に注目し、データを客観的に観察する技術においては貢献できたが、非常に限定された状態—発言部と空白部一間の移行であるため、turnの割り当ての問題をさほど解明できなかった。その後Jaffe & Feldstein (1970)は、話者内の沈黙、話者間の沈黙、個人的な発声の特徴、同時発話の長さに関連するデータを提示するなど、確率モデルをより発展、改善させた。また、Cappella (1979, 1980)もJaffe & Feldstein (1970)の観点を受け継ぎながら、turn-takingの確率性はインターアクションの過程で変わりえるとし、より複雑なモデルの連鎖を記述することによって、このアプローチを精緻化した。

確率性モデル・アプローチは、データを客観的に測定して記述する点やturn-takingという言語事象に問題意識を提起した点で高く評価される。しかし、実際の会話におけるturn-takingには物理的計量で測れる以上の複雑かつ多様な側面があり、発言部と空白部という非常に単純化された状態間の移行だけで掴み切るには無理がある。

3.3.2 シグナル・アプローチ (signalling approach)

Duncan (1972, 1973, 1974, 1977)は、コンテキストの中で会話参加者が話す権利を持ち続ける持続時間内で行われる全てのことを視野に入れて、turnとnon-turnに分け、それらの関係を記述することによって、speaker changeの詳細を描き出すことができるとする。メッセージを伝える意図のある、一つ以上のmoveを含む発話をturnとし、その他のback-channelやside-commentなどはnon-turnとすることについては、3.1.2 ノンテクニカル・アプローチで既に述べたとおりである。

シグナル・アプローチは、speaker changeを様々なシグナルによって調整されるものと捉える。また、シグナルの構成要素となるキューとして、イントネーション・パラ言語・非言語行動・シンタクス・社会中心的シーケンスなどがあるとする。Duncan & Fiske (1977)のturnシステムで分析の基本単位となるのは、話し手が替わる際に現話者によって発せられる発話末尾の音素節であり、それは次のようなキュー(各シグナルは一つあるいはそれ以上の行動的

なキューで構成される)を一つ以上含むものである。例えば、文法節の完了、ゆっくりした話し振り、音素節の末尾や中でピッチを落としたり大声を出したりすること、可聴の呼吸、埋められていないポーズ、間違った開始、身振り・手振りや手のくつろぎの終了、聞き手の方に頭を向けること、足のくつろぎなどがある。また、turn-taking のメカニズムは、基本的に二つのシグナル、① speaker turn signal (Duncan (1972)で turn yielding signal としたもの)と、② speaker gesticulation signal (Duncan (1972)で attempt suppressing signal としたもの)から成る。① speaker turn signal は、相手に turn を渡すというシグナルであり、次の turn を取ろうとする聞き手の試みに応じて turn を譲る際のシグナルである。一方、② speaker gesticulation signal は、聞き手の次の turn を取ろうとする試みを現在の話し手が抑制するシグナルである。

Duncan らによる研究の最大の成果は、二者間の対面会話において、様々なシグナルと turn-taking の営みとの関係に注目し、そのメカニズムを説明しようとしたことである。シグナル・アプローチのいうように、様々な会話場面では言語使用に伴う多数の非言語行動のタイプがあり、それらが各々のコンテキストにおいて turn-taking に関わることは否めない。確かに、発話やパラ言語、体の動き、参加者の社会的あるいは個人的特性などが合わさり、コンテキストを作り上げる。従って、話し手は相手の非言語行動の中で、承認や非承認、傾聴しているか否か、フロアーの獲得を望んでいるかなどが認知できる場合もある。しかしながら、第三者が話し手や聞き手の意図を推測し、さらに再構築することは決して容易ではないはずである。また、Rosenfeld (1978)も指摘しているように、会話の中で見られるジェスチャーの形と頻度は個人差があるため、それが本質的に turn-taking と強い相関を持つとは言えず、turn シグナルをどのように判定し、その機能を明示することは難しいところである。問題は、これらのシグナルが turn-taking システムにどのように関わり、そのメカニズムを解明するための手助けとなり得るかどうかなのである。

3.3.3 連鎖アプローチ (sequential production approach)

連鎖アプローチでは、会話を成立させるメカニズムを、会話参加者自身に起源を持つコンテキスト

に敏感なものとする。会話参加者は turn-by-turn を基本にして発話を産出するものであり、連鎖的なコンテキストの中で turn-taking のプロセスを調整するものである。SSJ は、turn-taking システムを、会話参加者によって運用され、局所的に管理される相互行為的な調整であるとし、コンテキストの連鎖性を強調する。SSJ は、これまでの帰納的な研究方法とは異なる方法を用いて分析を行う。つまり、会話に見られる一連の一般的な事実を提示した上で、turn-taking のメカニズムがこれらの事実と契合するかどうかを問う方法である。turn-taking のモデルは、日常会話の中で自然に行われる会話を詳細に分析した結果得られた、以下の事項について説明可能であるとされる。

- (1) 話し手の交替は繰り返し行われる。
- (2) 一度で一人が話すことが圧倒的に多い。
- (3) 一度に二人以上の話し手が生じることは普通だが、持続時間は短い。
- (4) ある turn から次の turn への移行にはギャップや重なりを伴わないのが普通であるが、わずかなギャップや重なりもあり得る。
- (5) turn の順序は固定しておらず、様々である。
- (6) turn のサイズは固定しておらず、様々である。
- (7) 会話の長さは前もって固定されていない。
- (8) turn の内容は前もって固定されていない。
- (9) turn の相対的配分(relative distribution of turns)は前もって固定されていない。
- (10) 会話参加者の人数は様々である。
- (11) 会話は連続的でもあり得るし、非連続的でもあり得る。
- (12) turn の割り当てテクニック(turn-allocation techniques)が明らかに用いられる。
- (13) 様々な turn 構成単位 (turn-construction units) が用いられる。
- (14) turn 取得のエラーと違反を扱うための修復メカニズムが利用可能である。

(SSJ 1974: 700-701、筆者訳)

SSJ の turn-taking システムは、「turn 構成要素 : "turn-constructural component"」と「turn 割り当て要素 : "turn-allocational component"」、そして turn 移行に関する一連の規則から成り立つ。まず、turn を構成する「ユニット・タイプ : "unit-type"」には単語・句・節・文などがある。話し手はこれらを駆使し、最後まで話す権利を保持する。そして話し手の turn

が終了し、次の話し手に turn が移行し得るところを「移行関連場：“transitional-relevant place”」(以下 TRP とする)と呼ぶ。聞き手が話し手の turn 完了を予期する(project)のも、この TRP である。その場合、話し手の優先順番をめぐる規則は次のとおりである。

- 1-(a) 現在の話し手が次の話し手を選択した場合、選択された者が次に話す優先的な権利と義務を持つ。
 - (b) 現在の話し手による選択がなかった場合、自己選択によって最初に話し始めた者が話す権利を持つ。
 - (c) 誰も自分から話し始めなかった場合、現在の話し手がさらに話し続けても良い。
2. 1-(c)によって現在の話し手が話し続ける場合、次の TRP で1の(a)~(c)が繰り返される。

(SSJ 1974: 704, 筆者訳)

このシステムは研究者による単なる理論的産物ではなく、我々が様々な状況で適切に話し合うのに用いる一つの方法であり、事実でもある。このシステムは個々の具体的な状況に適合するような形で用いられると同時に、大半の会話に見られる普遍的な事実なのである。つまり、社会的・文化的・言語的なコンテキストを問わず、どのような会話における turn の割り当てにも適用できるものとして提案されたものである。このような意味で、turn-taking システムは普遍性を持つと同時に、個別的地位への適応性を持つ (context-free and context-sensitive)とされる。

SSJ は turn-taking 研究を切り開き、脚光を浴びながらも、様々な面で批判され、再考した上で精緻化すべきであるとの指摘も少なくない。turn 構成要素と移行関連場(TRP)について詳細な記述が欠如していることに起因する、turn 完了の予期可能性 (projectability)の問題 (McLaughlin 1984; Wilson et al. 1984; Power & Dal Martello 1986)、turn と non-turn の区別が明示されていないことによる相づちや非言語行動などの扱いの問題 (Edelsky 1981; McLaughlin 1984; Power & Dal Martello 1986)、turn 割り当て規則の違反に対する修復装置が単純化されているため、重なりやギャップなどの現象が十分説明できない問題 (Garvey & Berninger 1981; McLaughlin 1984)、turn-taking システムが他言語社会にも適用可能かという疑問 (Philips 1976)などが挙げられる。

上述した問題点の中で最も批判される点は、turn-taking システムの中核概念をめぐる問題であると考

えられる。つまり、turn の構成要素である unit-type の完了と、turn が替わり得るところ(TRP)の予期可能性に関する問題である。SSJ によると、会話における話し手の交替は大概自然な境界線で行われるとされる。現話者ではない他参加者が話し始める地点があり、ここが TRP となる。TRP は、turn の構成要素である unit-type が完了すると予期されるところであり、ここで turn-taking が起こり得るとされる。turn 構成要素について、「話し手が turn を構築するのに用いる unit-type は様々であり、英語における unit-type には文・節・句・単語などが含まれる」と述べている(SSJ 1974: 702-703)ことから、unit-type の完了を判断するのに構文的な要因が重要視にされていることが分かる。ここで浮かび上がる問題は、① unit-type の完了あるいは未完了に明確な差異はあるのか、それとも完了の度合いの差だけなのか、② TRP を予期するため、unit-type の完了あるいは未完了の判断を下す指標となるのは、unit-type のどの側面 (韻律的・構文的・意味的・語用的側面など)に基づいているかということである。このように、話し手の選んだ unit-type を、聞き手がいつ、どのように認知して予期するかについて、さらにはそれが可能か否かに関して言及されていないことが致命的な弱点であると言える。このことが、予期可能性の解明を試みた数々の研究を生み出す背景となっている。詳細は、次章に譲ることとする。

4. turn-taking 研究の現状：turn 構成要素の完了を予期するリソースに関する研究を中心に

SSJ よって turn-taking システムが提唱されて以来、会話における turn-taking の事実は明らかになったものの、そのメカニズムはまだ十分に解明されていない。今尚、turn-taking システムの基本概念となる、turn を構成するユニット(TCU: turn-constructive unit)の完了及び可能な移行関連場(possible TRP)を予期するための指標となるリソースと、turn-taking との関係を究明しようとする研究が行われている。

SSJ は、TCU を主に構文的観点で捉えており、一つの単語から句、節、文、さらには複数の文に至るまで様々であるとし、相互行為的に決められるものとする。そして、参加者達は TCU が完了するところを予期し、TRP で turn を取ることによって、次話者になるのである。しかし、会話における TCU の完了を予期するには、構文的な要因の他に

プロソディーとの関係が重要となる (Chafe 1988, 1993; Du Bois, Schuetze, Paolino & Cumming 1993)。さらに、Schegloff (1988)は、構文的要因やプロソディーに加え、ジェスチャーや連鎖的な行為も大事な役割を果たすとし、TCU の開始部・中間部・終結部への関心を寄せている。Ford, Fox & Thompson (1996)は、TCU とその予期可能性に関わる様々な要因(プロソディー・文法・語用・非言語行動)を認め、参加者達はこれらを瞬時に読み取ることによって、TCU の完了を予期すると述べる。しかし、それぞれの役割の比重を計るまでには至っていない。

そこで、Schegloff (1996)では、文法と turn の組織化に焦点を当てることで、言語と相互行為の界面を探究する。理由は、言語が相互行為に現れる際、turn そのものが宿主(hostspace)となるからである。言語と相互行為の界面を探ることによって、会話参加者のリアルタイムの営みが説明でき、そのリソースを提示することができる。と同時に、turn を構成する TCU の組織化の装置(organizational device)を見出すことができる。ここでいう文法とは、時間性を含まない静的な構文論的概念ではなく、相互行為というリアルタイムの中で話し手と聞き手によって構造化され、実現されていくものである。こうした文法が、相互行為の中にどのように組み込まれ、どのように働くかを調べることで、相互行為における文法の役割を確かめ直そうとする動きが盛んになっている(Ford & Thompson 1996; Ford, Fox & Thompson 1996; Fox & Thompson 1996; Fox, Hayashi & Jaspersen 1996; Furo 1998a, 1998b; Lerner 1996; Schegloff 1996; Tanaka 1999)。

一つの turn が単一の TCU で成り立ったにせよ、複数の TCU で成り立ったにせよ、その中には必ず TCU 開始部(beginning)と TCU 終結部(ending)が含まれる。TRP を予期する際、現話者の TCU 終結部と次話者の TCU 開始部が関わることは自明のことである。TCU 終結部の「これまで」に結びつき、TCU 開始部の「これから」が TRP の予期を可能にするため、これらを切り離して考えることはできない。TCU 開始部については、Jefferson (1979)を始め、Goodwin & Goodwin (1987)、Schegloff (1980, 1987, 1988, 1996)などに数多く報告されているが、本稿では TCU の境界を決める終結部とその予期可能性に関する研究に絞る。まず、TCU 終結部の完了を予期するリソースとなるものを想定し、それらの完了

点を統計的に分析して、TRP との位置関係を調べた Ford & Thompson (1996)と、その枠組みを日本語に対応して調べた Furo (1998a, 1998b)を紹介する。次に、日本語固有の turn の運用性に焦点を当て、日・英の比較を行った Tanaka (1999)をまとめる。

Ford & Thompson (1996)は、turnの完了点(turn completion point)を予期するリソースとして、構文的・イントネーション・語用論的要因(syntactic cue / intonational cue / pragmatic cue)が考えられるとし、三要因が収斂するところを CTRP (complex transitional-relevant place)と名づけ、speaker change (turnとspeakerという用語に混乱が生じ得るとの批判を受けてか、turn-takingの代わりにspeaker changeとしている)との関係を実証的に調べる。そうすることによって、言語構造と相互行為との相関が究明され、その中でも今まで最も有力とされてきた構文的完了点が、turn完了を予期するのにどの程度まで作用するかがより鮮明になってくると考える。まず、用語の定義や判定基準を記す。

- 構文的完了点 (Syntactic Completion Point) :

コンテキストから分離された文法的ユニットというより、先行発話との関係で決められるものである。現行発話に述語がなくても、先行発話に顕在的・直接的に取り戻せる述語があった場合、構文的に完了された発話と見なされる。つまり、省略句や問いへの答え、相づちなどは述語がなくても、構文的に完了されたものとなる。

- イントネーション完了点 (Intonational Completion Point) :

Du Bois et al. (1993)のイントネーション・ユニット(単一の一貫したイントネーション曲線で発せられる一続きの発話)に基づいており、これは prosodic cue (ピッチの度合、方向)と timing cue (語頭のテンポの加速、語末の延ばし、0.3 秒以上のポーズ)で決められる。機械による測定は行わず、耳の知覚による判断に基づいて、完了(final ending contour)か非完了(non-final contour)かという特徴のみに注目する。

- 語用論的完了点 (Pragmatic Completion Point) :

イントネーション完了点を伴い、特定の連鎖的コンテキストの中で完了された発話行為として解釈されるものを指す。構文的完了点やイントネーション完了点に比べ、主観的な判定になる可能性は否めないが、判定方法や結果が今後 turn 完了点の予期

可能性を探究するための下敷きになれることを望むとし、分析の指標として用いる。

- CTRP (complex transitional-relevant place) :
speaker change が起こり得る地点で、各完了点がすべて一致するところを指す。

- Speaker Change :

現話者ではない者が turn を取る地点で生じ、full turn speaker change と back-channel turn speaker change がある。ここでいう back-channel とは、話し手の発話中に聞き手の役割を果たす者によって発せられる短い発話のことであり、傾聴・理解・興味の表示、協調的な終わり、言葉探しの助けなどの機能を持つ。また、笑いの開始も speaker change と見なす。これら三つの turn type (full turn, back-channel turn, 笑い) が同質のものとは言えないが、区別しないことにする。なぜならば、これらは、次の turn を開始する conversation unit として同等であると認められるためである。speaker change 地点は、次の話し手の発話開始に最も近い現在の turn 完了点で行われるとする。

Ford & Thompson (1996)は、分析の結果⁶、構文的完了点が speaker change を予期するための唯一のリソースではないが、イントネーション完了点と語用論的完了点が、通常構文的完了点を伴っていることから、speaker change に関与する欠かせない一要因であることを明らかにした。また、speaker change の 71% が CTRP で行われることから、CTRP が speaker change の最も有力な指標であることが分かった。一方、CTRP と speaker change が一致しないところ(全体の 29%)—non-CTRP での speaker change、CTRP での no-speaker change—にも注目する。non-CTRP での speaker change は、次話者の早めの turn 開始によって重なりが生じる場合であり、CTRP での no-speaker change は現話者が CTRP を過ぎても話し続ける場合である。これらの実例を挙げながら、潜在的な秩序(potential orderliness)を見出し、方略的でパターン化された相互行為であるとした。

Furo (1998a, 1998b)は、この枠組みを用いて、日本語の会話 (Furo 1998a)と討論 (Furo 1998b)における CTRP と speaker change の関係を調べた。分析の手順と各完了点の判定基準は Ford & Thompson (1996) に従うが、日・英語の構文上の相違から若干の修正を加える。まず、構文的完了点について、日本語は

SOV 構造を持ち、述語が文末に来ることから、述語を主な指標とする。そのため、述語の後に来る単語や句は付加されたものとする。また、議論の余地が残っている語用論的完了点については、Schegloff (1996)のいう action (質問など認知可能な発話行為)⁷ が実行された場合を、語用論的に完了されたものと見なす。分析の結果、CTRP の殆どが語用論的完了点と一致しており、speaker change の 76% が CTRP で行われ、特に full turn speaker change の約 90% が CTRP で行われることから、CTRP は speaker change の最も強い指標であることが分かった。さらに、CTRP と speaker change が一致しない実例からその出現状況(他者への協調・情報追加・質問や明確化要求・驚き・先行発話の修正・強い賛成や反対・新トピックの導入)を探り、これらは会話参加者間の相互行為の中で誘発されるもので、システムティックに現れるとした (Furo 1998a)。

一方 Tanaka (1999)は、構文的ユニットは必ずしも顕在的な文法構造によって判別できるものではなく、隠れてはいるが取り戻せる要素の根源となる参加者の知識を追求することで明らかになると述べている。これは、Maynard (1989: 32-33)の「日本語は助詞や名詞句、動詞の省略が多い言語として知られており、それは回復・認知可能な文法・コンテキスト・社会文化的な情報を組み込むことで解釈される」としたことと相通じる。Tanaka (1999)は、まず SSJ の turn-taking システムが日本語にも適用できるかを探り、日本語と英語は基本的に類似した turn-taking ルールの基で運用されるとした上で、共通のルールが実行される際に用いられる言語的あるいは他のリソースは、それぞれ異なった形で具現化し、運用されるとした。Tanaka (1999)は、SSJ の基本概念となる予期可能性について日・英語間の比較を行う際、次の二つを前提とする。①会話参加者達には、現在の turn が完了し得る、可能な TRP を予測することが要求される。②それを会話参加者達に予測させるのは、turn の持つ性質である。そして、Ford & Thompson (1996)や Furo (1998a, 1998b)と同様に、構文的・イントネーション・語用論的リソースと TRP の位置との相関を量的に調べ、日・英間の相違を明らかにした。日本語は英語と比べて構文的完了点の数が少ないこと(日: 422 / 20分、英: 798 / 20分)、英語での TRP は殆ど全ての場合に構文的に完了されるが、日本語では必ずしもそうとは限らな

いことの二点である。つまり、日本語は、語用論的に完了されても構文論的には完了されていない場合が多いということになる。そこで、語用論的に完了された turn の終結部(turn-ending)を調べた結果、次のようなタイプが見られた。なお、割合は語用論的完了点に占める割合である (Tanaka 1999: 97)。

・ 構文的完了の turn (intonational & pragmatic & syntactic completion)

(1) utterance-finals elements(文末要素)⁸を伴う turn-ending : 62.6%

(2) utterance-final elements を伴わず、recompleter (補足)で終わる turn-ending : 10.5%

(3) utterance-final elements を伴わず、truncated form (言い切り)で終わる turn-ending : 14.0%

・ 構文的未完了の turn (i & p - s)

(4) 引用・接続助詞などの extension⁹を伴う turn-ending : 11.7%

(5) その他 : 1.2%

このような結果から、turn の終結がどのようになっているかを見る際、イントネーション・語用論的要因のみならず、構文的完了のより詳細な様相を考慮に入れることの必要性が確められた。

また Tanaka (1999)は、文法は turn 完了や TRP の予期だけではなく、turn の生成方法にも影響するとし、日・英の比較を行った。語順の制約が厳しい英語の場合、turn が産出されてから早い段階で turn の完了や TRP を予期することができる。他方、日本語の場合は、比較的自由的な語順の制約や述語が最後に来ること、多様な助詞が用いられることで、turn が様々な形に変化し得る。このような文法的特性のため、日本語では turn がどのように生成して発展し、終わるかが予期し難くなる。これを解決するための装置として、会話参加者は turn 終結部の文法要素とプロソディーを採用するとされる。このように Tanaka (1999)は、日本語における turn の運用性 (operationalisation)を調べ、それは付加的な変形可能性 (incremental transformability)を持つとし、そのため TRP の遅延された予期 (delayed projectability)が見られるとした。

このような分析結果は、turn 完了を予期させるリソースと speaker change との密接な関係が実証できたことに加え、さらなる意義が認められる。前述した、SSJ の turn-taking システムに対する数々の批判を思い出してみよう。①turn と non-turn の区別がな

いことによる相づちの扱いの問題、②turn の定義が明記されず、turn と話者または話す権利という用語が混用されているため、理解と分析が難しくなる問題、③turn 構成要素と TRP に関する詳細な記述の欠如に起因する turn 完了の予期可能性の問題があった。Ford & Thompson (1996)、Furo (1998a, 1998b)、Tanaka (1999)の研究における分析手順や用語の使い方に上記の批判を踏まえた改善が見て取れる。まず、全ての発話を turn とし、full turn と back-channel turn に分け、話し手の発話中に聞き手が発する短い発話 (傾聴・理解・興味の表示、協調的な終わり、言葉探しの助けなど)を back-channel turn とすることで、turn と non-turn の区別にまつわる批判を一掃することができた。次に、多様に解釈されて誤解されやすい turn-taking の代わりに speaker change という言い方をするすることで、理解と分析上の混乱が防げる。さらに、turn の完了と TRP を予期するリソースとして、構文的な要因にイントネーション・語用論的要因を取り入れ、新たに CTRP を提唱することによって予期可能性への理解を深めることができた。と同時に、CTRP と speaker change が一致しない場合について、会話参加者達は常にそれぞれの turn を正確に整然と実在させているだけではなく、その都度の相互行為の中で協働的に組み立てていく活動の現れであるとした。これらの研究から得られた知見が、社会的行為としての会話と、構文・イントネーション・語用論を含んだ言語構造との関連性を探る、さらなる実証研究に役立つことと思われる。

5. おわりに

会話というものを家造りに喩えたとしたら、家を建てるのに必要な諸材料は turn に当てはまるように思われる。本稿で、turn の概念や範囲を調べる契機となったのは、会話は何をもって成り立っているかという素朴な疑問からであった。家造りに先立ち、諸材料の材質や成分、大きさなどを知っておくことが不可欠なのは言うまでもない。本稿で述べた、turn 構成要素の詳細な分析が、正にそれに当たる。

ザトラウスキー (1993)によると、会話には様々なレベルの構造があり、「turn-taking」や「応答ペア」などは二つの発話間で決められるもので、会話のあらゆる箇所に見られる局所的な仕組み (local management organization)であるとされる。他方、会話そのものを一つの総体として捉え、二つ以上の

turn から成るひとまとまりの発話の連鎖を見るのは全体的構造 (overall organization) であるとされる。

言い換えれば、turn 構成要素の完了と予期可能性を探求する分野、または turn の性質による分類などは、いわゆるマイクロ研究に属す。一方、turn 構成要素から成る turn が移り変わることで成立する turn-taking、そしてその繰り返しによって形成される turn-taking パターン、さらにはパターンの連なりから成る連鎖型などの抽出は、マイクロ研究の視点をより広げた分野であり、いわゆるマクロ研究に属すものと捉えられる。しかし、このような両観点で turn-taking の局部的・全体的構造を同時に探った研究はあまり見当たらない。そこで金 (2000, 2001) は、これら両観点を取り入れ、韓国語と日本語の会話における turn-taking の実態を把握する試みを行った。すなわち、turn の概念と範囲を定めた上で、turn と turn-taking タイプの分類を提示したミクロな研究 (金 2000) と、turn-taking の全体的な構造を探る一環として turn-taking パターンとその連鎖型を抽出し、両言語の優位な連鎖型とそこに見られる言語行動を実証的に調べたマクロな研究 (金 2001) である。このように、両観点から韓・日語における turn-taking を記述し調べることによって、それぞれの turn-taking の実態を把握することができ、さらには双方の異同をも明らかにすることができたと思われる。

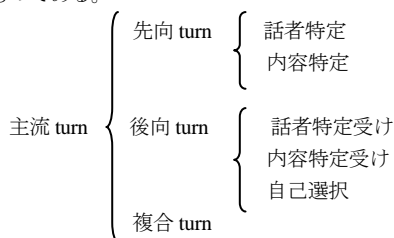
管見の限り、異言語社会の持つ固有の turn-taking システムを総括的に捉えた研究は、あまりなされていないのが現状であり、研究成果の蓄積が望まれる。このような微・巨視的な見地からの探究こそが、turn-taking の実態を掴む王道に他ならず、断片的な見地によって俯角しかねない歪みを最小限に留める道に繋がるに違いない。

注

1. Schegloff (1968) は、ある要素 A が存在し、当然その次に存在すると期待される要素 B がある時、「状況の適切性」があるとする。この場合 B があれば B は A の条件を満たす要素として存在すると考えられ、B がなければ A に続いて当然あるべき要素が欠如していると意識される。
2. フロアーとは、会話中のトピックなどが心理的または時・空間内で認識され、今進行していることである (Edelsky 1981)。また、フロアーを得るということは、全体の注意を得ること、話者としてのスポットライト

を浴びることを意味する (新井 1995)。

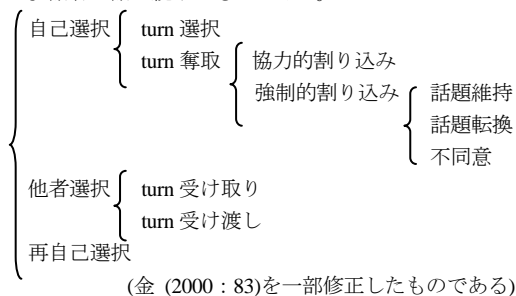
3. 津田 (1989) は、move を「会話中に話し手が発するスピーチの最小の機能的な単位」と定義づける。元来、move とは、チェスなどの駒の動きを意味する語である。それが会話分析に応用されて、相手に対してどのような働きかけをするか、どういった「手」を指すという、質問・陳述・要求などの機能を担う最小の単位として用いられるようになった (田中 1990)。
4. 杉戸 (1987) は、発話の種類を内容的な側面から「実質的な発話」と「あいづち的な発話」に分ける。「実質的な発話」とは、実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など事実の叙述や聞き手へのはならきかけをする発話を指す。「あいづち的な発話」は、応答詞を中心にする発話、先行発話の繰り返し、オーム返しや単純な聞きかえし、感動詞だけの発話、笑い声など実質的な内容を積極的に表す言語形式を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的にはたらきかけもしないような発話を指す。
5. 新井 (1995) は、主流 turn を turn-taking における性質の違いから、先向 turn・後向 turn・複合 turn の三つに分類する。「先向 turn」とは、turn-taking において次の turn の起り方に何らかの影響を与えて終わる性質のもので、話者特定・内容特定がある。「後向 turn」とは、turn-taking において前の turn から何らかの影響を受けて始まり、次の turn の起り方には影響を与えない性質のもので、話者特定受け・内容特定受け・自己選択がある。「複合 turn」とは、先向 turn と後向 turn を複合させたもので、前の turn から何らかの影響を受けて始まり、次の turn の起り方に何らかの影響を与えて終わる性質のものである。



(新井 1995 : 22)

金 (1997, 2000) は、主流 turn における turn-taking を、次の turn が誰に割り当てられるかという点から、自己選択・他者選択・再自己選択の三つのタイプに分ける。「自己選択」とは、現話者が次話者を選択しない場合、自己選択した者が話し始めるものであり、現話者の turn が終わってから turn を取る turn 選択と、現話者の turn がまだ終わっていないうちに turn を取

る turn 奪取がある。後者は、その内容や割り込み者の姿勢の違いによって協力的割り込み・強制的割り込みに分けられる。「他者選択」とは、現話者が次話者を選択し、選択された者が話し始めるものであり、現話者が他参加者に質問や問いかけることで turn を割り当てる turn 受け取りと、参加者 A が C に turn を割り当てるために現話者 B の turn の直後に turn を取り、質問などを用いて、C に turn を与える turn 受け渡しがあがる。「再自己選択」とは、現話者が次話者を選択せず、かつ他の参加者も自己選択しない場合、現話者が話し続けるものである。



(金 (2000 : 83) を一部修正したものである)

6. Number of Syntactic, Intonational, and Pragmatic Completion Points

	Ford & Thompson (1996: 153)	Furo (1998a: 45)
	English (20min.)	Japanese (20min.)
Total syntactic completion	798	853
Total intonational completion	433	695
Total pragmatic completion	422	659
Syntactic <u>and</u> intonational	428	689
Syntactic <u>and</u> pragmatic	417	659
Syntactic <u>and</u> intonational <u>and</u> pragmatic	417	659

7. Schegloff (1996) の action という概念は、Austin (1962) と Searle (1969) の speech act (発話 / 言語行為) に基づくものと思われる。speech act とは、命題的意味 (locutionary meaning) と発話内力 (illocutionary force) を持つ文または発話のことであり、要請・指図・命令・不平・約束など多くの異なった種類の speech act がある (詳細は坂本 (1987)、坂本・土屋 (1986) 参照)。

8. Utterance-final elements (Tanaka 1999 : 85)

助動詞：ます、ました、ましょう…
 コピュラ：です、です、だ・な…
 終助詞：ね、よ、さ、か、の、わ、ぞ…
 要求や命令：ください、ちょうだい、なさい…
 形式名詞他：わけ、もの、もん、ん…

9. Extensions (Tanaka 1999 : 92)

引用助詞：と、って
 という
 と(って)いうか
 接続助詞：けど、けども、て、から、だから、ば
 接続助詞+終助詞 'ね'

参考文献

新井真美 (1995)「クラスルームリサーチー日本語教室での turn-taking 分析ー」(未公開) お茶の水女子大学大学院修士論文
 木暮津子 (2001a)「表現形式から見た発話権取得の方法ー情報提供発話を受け継ぐ場合ー」『平成 13 年度日本語教育学会第 9 回研究集会予稿集』14-19.
 木暮津子 (2001b)「日本語学習者の発話権取得に見られる特徴ー情報提供発話を受け継ぐ場合ー」『第 12 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』81-86.
 金 志宣 (1997)「韓・日の対照会話分析ーturn-taking を中心にー」(未公開) お茶の水女子大学大学院修士論文
 金 志宣 (2000)「turn 及び turn-taking カテゴリー化の試みー韓・日の対照会話分析ー」『日本語教育』105 号, 81-90.
 金 志宣 (2001)「turn-taking パターン及びその連鎖パターンー韓・日の対照会話分析ー」『人間文化論叢』第 4 巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 153-165.
 小室郁子 (1995)「"Discussion"における turn-takingー実態の把握と指導の重要性ー」『日本語教育』85 号, 53-65.
 ザトラウシキー・ポリー (1993)『日本語の談話の構造分析ー勧誘のストラテジーの考察ー』くろしお出版
 杉戸清樹 (1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相：座談資料の分析 (国立国語研究所報告 92)』68-106.
 田中智子 (1990)「発話の特徴記述についてー単位としての move と分析の観点ー」『日本語学』9 巻 11 号, 112-118.
 津田葵 (1989)「社会言語学 柴谷方良他編『英語学の関連分野 (英語学大系 第 6 巻)』大修館書店 363-479.
 西原鈴子 (1991)「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10 巻 10 号, 10-18.
 深澤のぞみ (1997)「会話への積極関与としての割り込み発話ー異文化間コミュニケーションギャップとの関連性ー」『平成 9 年度日本語教育春季大会予稿集』27-32.
 橋内武 (1999)『ディスコース：談話の織りなす世界』くろしお出版
 初鹿野阿れ (1998)「発話ターン交代のテクニックー相手の発話中に自発的にターンを始める場合ー」『東京 外国語大学留学生日本語教育センター論集』24 号, 147-162.
 舟橋宏代 (1994)「談話の進行における日韓母語話者の

- 姿勢』『平成 6 年度日本語教育学会春季大会予稿集』91-96.
- 牧野由美 (2000)「日本語学習者のためのターン・テーキング教育を目指して—大学生の日常会話を資料として—」『平成 12 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』98-103.
- 南不二男 (1972)「日常会話の構造—とくにその単位について—」『月刊言語』1 巻 2 号, 108-115.
- メイナード・泉子 (1993)『会話分析』くろしお出版
- 山崎敬一・好井裕明 (1984)「会話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待—」『月刊言語』13 巻 7 号, 86-94.
- 李 麗燕 (1999)「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」—発話順番のやり取りとの関係を中心に—」『世界の日本語教育』第 9 号, 221-239.
- 渡辺吉鎔 (1985)「会話分析にみる日・韓コミュニケーション・ギャップ」『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』1 号, 132-149.
- Austin, J. L. (1962) *How to do things with words*, Oxford: Clarendon Press. (坂本百大訳 1987 『言語と行為』大修館書店)
- Brady, P. T. (1965) A technique for investigating on-off patterns of speech, *Bell System Technical Journal*, 44, 1-22.
- Brady, P. T. (1968) A statistical analysis of on-off patterns in 16 conversations, *Bell System Technical Journal*, 47, 73-91.
- Brady, P. T. (1969) A model of generating on-off speech patterns in two way conversation, *Bell System Technical Journal*, 48, 2445-2472.
- Cappella, J. N. (1979) Talk-silence sequences in informal conversation I, *Human Communication Research*, 6, 3-17.
- Cappella, J. N. (1980) Talk-silence sequences in informal conversation II, *Human Communication Research*, 6, 130-145.
- Chafe, W. (1988) Linking intonation units in spoken English, In J. Haiman & S. A. Thompson (Eds.), *Clause combining in grammar and discourse*, Amsterdam, PA: John Benjamins Publishing Company, 1-27.
- Chafe, W. (1993) Prosodic and functional units of language, In J. A. Edwards & M. D. Lampert (Eds.), *Talking data: Transcription and coding methods language research*, Hillsdale, NJ: Erlbaum, 33-43.
- Cherry, L. & Lewis, M. (1976) Mother and two year olds: A study of sex differentiated aspects of verbal interaction, *Development Psychology*, 12, 278-282.
- Du Bois, J., Schuetze-Coburn, S., Paolino, D., & Cumming, S. (1993) Outline of discourse transcription, In J. A. Edwards & M. D. Lampert (Eds.), *Talking data: Transcription and coding methods language research*, Hillsdale, NJ: Erlbaum, 45-89.
- Duncan, S. (1972) Some signals and rules for taking speaking turns in conversation, *Journal of Personality and Social Psychology*, 23, 283-292.
- Duncan, S. (1973) Toward a grammar for dyadic conversation, *Semotica*, 9, 29-46.
- Duncan, S. (1974) On the structure of speaker-auditor interaction during speaking turns, *Language in Society*, 2, 161-180.
- Duncan, S. & Fiske, D. W. (1977) *Face-to-face interaction*, Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Edelsky, C. (1981) Who's got the floor?, *Language in Society*, 10(3), 383-421.
- Edwards, J. A. & Lampert, M. D. (1993) *Talking data: Transcription and coding methods language research*, Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Feldstein, S. & Welkowitz, J. (1978) A chronography of conversation: In defense of an objective approach, In A. W. Siegman & S. Feldstein (Eds.), *Nonverbal behaviour and communication*, Hillside, NJ: Erlbaum, 329-378.
- Ford, C. E., Fox, B. A., & Thompson, S. A. (1996) Practices in the construction of turns: The 'TCU' revisited, *Pragmatics*, 6(3), 427-454.
- Ford, C. E. & Thompson, S. A. (1996) Interactional units in conversation: Syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns, In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 134-184.
- Fox, B. A., Hayashi, M., & Jaspersen, R. (1996) Resource and repair: A cross-linguistic study of syntax and repair, In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 185-237.
- Furo, H. (1998a) Turn-taking in Japanese conversation: Grammar, intonation and pragmatics, In S. Iwasaki (Ed.), *Japanese / Korean Linguistics*, 7, Stanford: SLA, 41-57.
- Furo, H. (1998b) Turn-taking in Japanese political debate: Syntax, intonation and pragmatics, In S. Iwasaki (Ed.), *Japanese / Korean Linguistics*, 8, Stanford: SLA, 31-44.
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in ethnomethodology*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Garvey, G. & Berninger, G. (1981) Timing and turn taking in children's conversation, *Discourse Process*, 4, 562-568.
- Goodwin, C. & Goodwin, M. H. (1987) Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments, *IprA Papers in Pragmatics*, 1, No.1, 1-52.
- Jaffe, J. & Feldstein, S. (1970) *Rhythm of dialogue*, NY: Academic Press.
- Jefferson, G. (1979) A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance / declination, In G. Psathas (Ed.), *Everyday language*, NY: Irvington Publishers, 79-96.
- Leiter, K. (1980) *A Prime on ethnomethodology*, Oxford University Press. (高山眞子訳 1987 『エスノメソドロジーとは何か』新曜社)
- Lerner, G. (1996) On the 'semi-permeable' character of grammatical unit in conversation: Conditional entry into the turn-

- space of another speaker, In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 238-276.
- Markee, N. (2000) *Conversation analysis*, NJ: Erlbaum.
- Maynard, S. K. (1989) *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*, Norwood, NJ: Ablex.
- McLaughlin, M. R. (1984) *Conversation: How talk is organized*, Beverly Hills, CA: Sage.
- Ochs, E., Schegloff, E. A., & Thompson, S. A. (1996) *Interaction and grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Owen, M. (1981) Conversational units and the use of 'well...', In P. Werth (Ed.), *Conversation and discourse: Structure and interaction*, NY: St.Martin's, 99-116.
- Philips, S. U. (1976) Some sources of cultural variability in the regulation of talk, *Language in Society*, 5, 81-95.
- Power, R. J. D. & Dal Martello, M. F. (1986) Some criticism of Sacks, Schegloff, & Jefferson on turn taking, *Semotica*, 58-1/2, 29-40.
- Richard, J., Platt, J. & Weber, H. (1985) *Longman dictionary of applied linguistics*, Longman. (山崎真稔・高橋貞雄・佐藤久美子・日野信行訳 1988 『ロングマン応用言語学用語辞典』南雲堂)
- Rosenfeld, H. M. (1978) Conversational control functions of nonverbal behavior, In A. W. Siegman & S. Feldstein (Eds.), *Nonverbal Behaviour and Communication*, Hillside, NJ: Erlbaum, 291-327.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simple systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, 50(4), 696-735.
- Schegloff, E. A. (1968) Sequencing in conversational openings, *American Anthropologist*, 70, 1075-1095.
- Schegloff, E. A. (1980) Preliminaries to preliminaries: Can I ask a question?, *Social Inquiries*, 50, 104-152.
- Schegloff, E. A. (1987) Recycled turn beginnings: A precise repair mechanism in conversation's turn-taking organization, In G. Button & J. R. E. Lee (Eds.), *Talk and social organization*, Clevedon, England: Multilingual Matters Ltd., 70-85.
- Schegloff, E. A. (1988) Discourse as an interactional achievement II: An exercise in conversation analysis, In D. Tannen (Ed.), *Linguistics in context: Connecting observation and understanding*, Norwood, NJ: Ablex, 135-158.
- Schegloff, E. A. (1996) Turn organization: One intersection of grammar and Interaction, In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 52-134.
- Searle, J. R. (1969) *Speech acts: An essay in the philosophy of language*, Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊訳 1986 『言語行為: 言語哲学への試論』頸草書房)
- Speier, M. (1973) *How to observe face-to-face communication: A sociological introduction*, Goodyear Publishing Company, Pacific Palisades.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse analysis: The sociolinguistic analysis of natural language*, The University of Chicago Press. (南出康世・内田聖二共訳 1989 『マイケル・スタップズ 談話分析: 自然言語の社会言語学的分析』研究社)
- Tanaka, H. (1999) *Turn-taking in Japanese conversation: A study in grammar and interaction*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- van Lier, L. A. W. (1988) *The classroom and the language learner: Ethnography and second-language classroom research*, London: Longman.
- Wilson, T. P., Wiemann, J. M., & Zimmerman, D. H. (1984) Model of turn-taking in conversational interaction, *Journal of Language and Social Psychology*, 3(3), 159-183.

きむ ちそん／梨花女子大学校 人文科学大学
jjsun_kim_k@hotmail.com

An overview of turn-taking research

— Some issues of "turn" and "turn-taking" —

KIM Jisun

Abstract

In this paper trends in research into "turn" and "turn-taking" sought, first describing the theoretical background of ethnomethodology, which uses conversation analysis as a method. Searching out from Japanese language translations controversial points which turn around "turn", the basic concept of "turn-taking" research, places where there are problems will be illuminated. There the method of seizing the carved in wood complex nature of "turn" will be outlined from two viewpoints, the technical and non-technical viewpoints, and by stepping over these, try to propose points where research aimed at Japanese should be supplemented. Next methods of identifying "turn-taking" will be critically examined from three viewpoints, the stochastic modelling approach, the signalling approach, and the sequential production approach. Finally, the results from central studies based upon and improving the research of the exalted pioneers of "turn-taking" research, Sacks, Schegloff, & Jefferson(1974) relating the basic concepts of the "turn-taking" system, the completion of turn-constructural units and resources for projection of transitional-relevant place, will be collected. By this means are given suggestions relating to the remaining topics concerning the revelation of the turn-taking system.

【Keywords】 turn, turn-taking, projectability of transitional-relevant place, conversation analysis

(Ewha Womans University, College of Liberal Arts)